学校だより

翔　　空

№３９　平成２５年　１月２１日（月）
郡山市立喜久田中学校長　大堀　昌弘

「翔空（しょうくう）」の由来　〈校舎のシンボル〉

壁画「空へ」を受け、風光明媚（ふうこうめいび）なこの学舎（まなびや）から、希望に燃え限りない空へ、力強く翔んでほしいという願いを込めて、翔空の碑ができた。

【名言・格言 第２弾】

今回紹介する名言は、くよくよすることの多い方にお薦めです。実は、こういう私も、今までこの言葉に何度となく励まされてきました。

まず、デール・カーネギーという思想家（啓発者）が好んで引き合いに出したカーライルという作家の次の言葉から紹介します。

「やるべきことは、遠くにぼんやり見えるものを見ることではなく、手近にはっきりと見えるものを行うことである。」

この言葉は、受験生である３年生に特に当てはまることだと思います。

そしてもう一つ。

「一年前にあなたが悩んでいた事柄を思い出していただきたい。どうやってそれを切り抜けただろうか。そうした悩み事ばかり気にかけて、エネルギーを浪費しなかっただろうか。結局、そうした悩みは、ほとんどが取り越し苦労だったのではないか。」

私が特に気に入っているのはこちらの方で、こちらはカーネギー自身の言葉です。

「益川先生があこがれる教育」

～いわゆる「ドンキホーテの理論」～

だいぶ昔の話になるのですが、皆さんご存じのノーベル物理学賞受賞者の益川敏英氏のインタビューをある雑誌で読んで感動しましたので紹介いたします。

○　先生はよく「ロマン」という言葉をお使いになりますね。

益川：僕は、「ドンキホーテの理論」と言っているのですが、まず第一歩を踏み出す。若者であれば最初持ったロマンや夢は、ほとんどが間違っています。ただ、何が間違っていて、何が正しいかはやってみないとわからない。自分が想像していたものと違っているということに気づくためには、まずは第一歩を踏み出さなければ実感することはできません。見ながらそして、知りながら修正して、新しいものを見つけていく。そこにこそ本当のロマンがあるのです。

○　今の教育は、そのロマンを求めるドンキホーテを育てているのでしょうか。

益川：僕は「教育汚染」と言っているのですが、今の日本の教育は、暗記教育です。教育すればするほど、子どもたちが本来持っている好奇心や興味を失わせています。先日、「コップに半分水が入っている。このコップを斜めに傾けたら水面はどうなるか」と質問したところ、高校生はこの問題に答えずに次の問題へと進んじゃっていました。この質問を小学生にやると一生懸命考えて答えを出すのですが、高校生は丸暗記の形で教えてもらっていない問題は時間の無駄だと点数の取れそうな次の問題へと進んだのです。大学入試はマークシート方式で、これだと間違っても０点、空欄でも０点なのでわからなくとも書かなきゃ損だと空欄を埋めますが、先のような問題だと埋めようがないのでスキップしてしまうんですね。このままでは、教育すればするほど、本当の教育から遠ざかっていると言わざるをえません。子どもたちの好奇心や興味をのばす教育こそが大事だと思います。もっと余裕をつくってあげて、「ロマン」を見つける教育をやってほしいです。

テレビのインタビューなどでとてもユーモアあふれる語りを聞かせてくれた益川さん。さすが、しっかりと「真理」をとらえているなと感心させられました。「子どもたちの自由な発想を最大限に生かす教育」を私たち教師集団は常日頃から念頭に置かなければなりません。そうでなければ、子どもの創造力やユニークな発想の生きる場がなくなってしまいます。

最後に、益川さんは次のような「重要な提案」も行っています。

益川：学習というものに対して軌道にのっていない子には別途対応が必要ですが、基礎体力の付いた子には、少々負荷をかけてもかけ過ぎということはありません。むしろ喜んでついてくると思います。僕はむしろ、今こそ「生徒には負荷を、先生にはゆとり」が必要だと思っています。